

三人の事績

「原敬は坂本龍馬の孫弟子」といったら驚かれるでしょうか。しかし、この二人の間に陸奥宗光という人物を配すれば、この表現はまんざら誤りともいきれなくなります。いったいどういうことなのか、以下説明していきたいと思いますが、その前に一応三人の事績を紹介しておきましょう。



図1 坂本龍馬

【坂本龍馬】(天保六・一八三五〜慶応三・一八六七年、図1)

幕末の志士。土佐藩の町人郷士(一般武士よりは身分が低い)として高知城下に生まれる。坂本家は城下の豪商才谷家の分家である。はじめ攘夷思想の影響を受け、武市瑞山の土佐勤王党に参加したが、後に脱藩した。そして勝海舟に入門し、航海術を学ぶ一方でその右腕として東奔西走した。慶応元年(一八六五)、薩摩藩の支援で長崎に亀山社中(後に土佐藩に属し海援隊と改称)を結成、海運に従事しつつ薩摩藩と長州藩の提携を促し、翌年一月に薩長同盟を成立させた。そして雄藩大名たちの会議による政治を行うべき、とする公議政体論を主張し、慶応三年十月の大政奉還実現に影響を与えた。自らは新政府への参加は辞退したが、幕府に狙われ、十一月十五日、京都の近江屋で見廻組の襲撃を受け、陸援隊の中岡慎太郎とともに殺害された(三十三歳)。

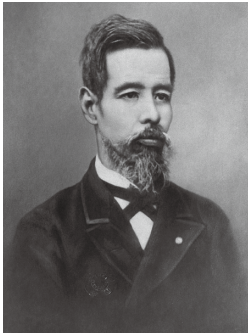


図2 陸奥宗光

【陸奥宗光】(弘化元・一八四四〜明治三十・一八九七年、図2)

明治時代の政治家・外交官。和歌山藩士伊達宗広の子として生まれる。幕末期には尊王攘夷運動に参加、亀山社中に入り、坂本龍馬を支える。維新後、新政府に入り、租税頭として地租改正の実施にあたった。明治七年(一八七四)元老院議員となるも、土佐立志社の政府転覆計画に関与したとして、同十一年免官となり、五年間山形や宮城で監獄生活を送る。出獄してヨーロッパで遊学した後、同十九年に外務省へ入り、二十一年駐米公使。二十三年帰国、五月に第一次山県有朋内閣の農商務大臣となる。七月、第一回衆議院選挙で和歌山県第一区から立候補して当選、閣僚中唯一の衆議院議員となる。二十五年八月、第二次伊藤博文内閣で外務大臣となり、二十七年七月イギリスと通商航海条約を締結し、領事裁判権の撤廃と関税自主権の一部回復に成功した。また日清戦争(明治二十七年・一八九四〜同二十八年・一八九五年)前後の外交にあたったが、激務から持病の肺結核が悪化、同三十年(一八九七)死去した(五十四歳)。

【原敬】(安政三・一八五六〜大正十・一九二二年、図3)

明治・大正時代の政治家。盛岡藩上級藩士の家に生まれる。明治八年(一八七五)、分家した際に自ら望んで平民身分を取得した。司法省法学校(現在の東大法学部)に入学したが、仲間の起こした事件の責任をとる形で退学、新聞社に入って評論活動を行った。これに注目した井上馨(長州藩出身の政治家)の推薦により、同十五年(一八八二)外務省に入る。天津領事やパリの日本公使館書記官などをつとめた後、農商務



図3 原敬

省に移る。ここで大臣となった陸奥宗光の知遇を得、二十五年陸奥が第二次伊藤内閣の外務大臣になると、原も同省に戻って陸奥を支えた。明治三十年(一八九七)陸奥が病没すると、原は官僚を辞め大阪毎日新聞の社長となる。その後、伊藤を総裁とした立憲政友会の結成に尽力、幹事長となり、さらに同三十三年第四次伊藤内閣の通信大臣(電信・郵便事業や海運業を統轄)として初入閣した。その後、西園寺公望内閣の内相を経て大正三年(一九一四)には政友会総裁に就任した。同七年米騒動によって寺内正毅内閣が倒れると、ついに後継首相となり(政友会を中心とした初の本格的政党内閣)、「平民宰相」と呼ばれた。当初は大戦景気を背景に強力に政策を推進したが、後に戦後恐慌による財政悪化や度重なる汚職事件、高圧的な政治運営に批判が集まり、人気は次第に衰えた。大正十年十一月四日、政友会近畿大会出席のために向かった東京駅で暗殺された(六十六歳)。

坂本龍馬と陸奥宗光のつながり

出会い

二人の出会いについては諸説あり、定かなことはわかっていません。坂崎斌(まつかん)(紫瀾(しらん)、明治時代の政治記者)

は、文久三年(一八六三)に龍馬が、当時京都の粟田口にいた伊達宗広(陸奥の父。和歌山藩重臣だったが失脚。学者としても知られていた)のもとをたびたび訪ねていたのがきっかけとしています。また陸奥本人はその自伝の中で、龍馬が陸奥の才を認めて神戸にある勝海舟の塾に入ることを勧めた、と回想しています。さらにその勝は、文久三年四月に海防視察のため紀州を訪れた際、藩主からの依頼で自らの塾に連れて帰った二十五名の「腕白者」の中に陸奥がいた(当時二十五歳)、としています。

これらの話を総合すると、陸奥は文久三年に勝海舟の塾に入り、そこで龍馬と接するようになったと推測されます。

海援隊における陸奥

その後、龍馬と陸奥のつながりはほとんどたどれなくなりですが、慶応二年(一八六六)十月の時点では、二人を含む土佐グループの人々が薩摩藩から毎月三両二分(米価換算で現在の約三十二万円)を支給されていたことがわかっています。

この前年、龍馬は長崎亀山を拠点として、西国諸藩のため運輸・貿易などを周旋する亀山社中を組織(後に海援隊と称す)、陸奥はそのメンバーとなっていました(図4)。慶応三年三月初、陸奥は上方で金策や商売のために動き、薩摩藩の重役と交渉しています。七月には「商法之愚案」と題する意見書を作成し、翌月龍馬に提出しました。ここでは西洋のコンパートメント(同



図4 海援隊士としての龍馬(左から3人目)と陸奥(龍馬の右隣り)

4

武家のつながり

名前や地域、一族間のつながり

ここでいう武家のつながりとは、中世において、ある武家の名字がまったく別の武家によって引き継がれるという名前のつながり、あるいは名字の地とは異なる地域に本拠を移す地域のつながり、さらにはいくつかの地域に分かれて住むようになった一族間のつながり、などをさします。これらの点について、以下特に有名な五氏に絞って紹介していきます。

上杉氏のとつながり

二つの上杉氏

上杉氏と聞くと、ほとんどの方はすぐに戦国武将上杉謙信のことを思い浮かべるでしょう。また少し詳しい方は、謙信の養子で豊臣秀吉や徳川家康に仕えた景勝、あるいは江戸後期の名君である米沢藩主上杉治憲（鷹山）をご存知かもしれません。しかし、本来の上杉氏は別に存在し、謙信はその家来筋にあたる武家の出身で、後述する事情により上杉氏の名跡を継いだ人物だったのです。

本来の？ 上杉氏

もともとの上杉氏は武家ではなく、藤原北家^{*1}の流れをくむ勧修寺家庶流の中級公家でした。不比等から十八代目にあたる重房（**図20**）が建長四年（一二五二）、初の宮将軍となる宗尊親王^{*2}に従って鎌倉へ下向し（実際には親王に同行した源通親^{*2}の娘、西御方の介添えだったと判断できる史料がある）、そのまま同地にとどまりました。そしてこの時の功勞により賜った丹波国何鹿郡上杉荘（京都府綾部市）にちなんで、上杉氏と名乗るようになったのです。

まもなく重房の娘が、幕府の有力御家人だった足利家に仕え、尊氏の祖父にあたる家時を生みました。また家時の子、貞氏が側室とした清子（重房の孫）は、尊氏や直義の母親です。すなわち上杉氏は、鎌倉下向後まもなく足利氏の家臣となり、しかも姻戚という特別な地位を得たのです。

足利尊氏（はじめ高氏）が他の諸勢力とともに鎌倉幕府を倒し、続いて後醍醐天皇を中心とする建武政権から離反して室町幕府を開くと、上杉氏はその重臣として活躍します。特に関東において鎌倉府（幕府が関東を統治するため鎌倉に設置した機関で、公方は尊氏の庶子基氏を初代とする足利氏）の執事、後には関東管領（鎌倉府のナンバー2）として、あるいは越後、上野、武蔵、伊豆などの守護として足利氏を支えました。上杉氏は、やがて複数の家に分かれ、それぞれが鎌倉に屋敷を構えた地名をとって山内、扇谷、犬懸、宅間家と称しました。このうち宅間家はまもなく衰退し、犬懸家も十五世紀初めの上杉禅秀の乱^{*3}で滅亡、そ



図20 上杉重房木造

（明月院所蔵）

の後には扇谷家が台頭して宗家である山内家と対立するようになったのです。また南北朝期には、初代山内家の当主上杉憲顕が鎌倉府執事や関東管領として権勢を振るいますが、その子憲栄に始まる家は代々越後守護をつとめたので、越後上杉氏と呼ばれるようになりました。そしてその代官を長尾氏といい、この家からやがて上杉の名跡を継ぐこととなる景虎（上杉謙信）が生まれたのです（図21）。

- * 1 藤原不比等の次男房前に始まる藤原四家の一つで、人臣初の摂政良房や初代関白基経らを輩出、道長に至り全盛期を迎えた。
- * 2 鎌倉初期の公卿・頼朝と結んで摂政・関白となった九条兼実を排斥し、朝廷内の実権を握り幕府と対立した。
- * 3 前関東管領上杉禅秀（氏憲）が鎌倉公方足利持氏に対して起こした反乱。一時鎌倉を占拠したが、幕府の支援を受けた持氏により反撃され、自害した。

長尾氏とは

ではこの長尾氏とはどのような武家なのか、紹介していきましょう。確実な史料がなく異説もありますが、そもそも長尾氏は桓武平氏良兼流で、平安末期に忠通という人物の子、景村が相模国鎌倉郡長尾郷（横浜市戸塚区）を根拠地として成立した、とされています。一方、景村の兄弟景政は、はじめ鎌倉氏を名乗っていましたが、やがてその一族も長尾氏を称し、この家が鎌倉御家人として活動していたようです。景村系の長尾友景は承久元年

年（一二一九）、摂家将軍となる九条頼経の供奉人として鎌倉に下向し、またその子景熙は宗尊親王下向の際、既に述べた上杉重房の介添えとして、やはり鎌倉に下ったとされています。これが正しければ、景村系の長尾氏は、はやくから京都に住み、しかも鎌倉下向以前の段階で上杉氏に仕えていた可能性が高くなります。一方、鎌倉にいた長尾氏は宝治合戦^{*}で三浦氏に従ったため、ほとんど滅んでしまいましたが、生き残った景忠という人物が景村系の長尾氏の家督を継ぎ、上杉氏の家臣となった、とされています。

以上の話はあくまでも諸説ある中の一部であり、定かなことは不明といわざるをえませんが、南北朝初期には上杉憲顕の越後守護代として長尾景忠という人物（前述の景忠とは年代的にあわない）が確実に存在するので、遅くとも鎌倉末期の時点では、長尾氏が山内上杉氏の家臣であったことはまちがいありません。室町期に入ると、上杉氏の発展にともない長尾氏も越後の他、上野や武蔵、伊豆の守護代、さらには山内家の家宰（当主の補佐役）となって勢力を拡大し、鎌倉や上野白井（群馬県渋川市）、上野総社（同前橋市）、越後、足利などを根拠地とする家に分かれていきました。

* 1 宝治元年（一二四七）、有力御家人三浦氏が執権北条時頼に滅ぼされた事件。これにより北条氏の専制体制への道が開かれた。

越後長尾氏

このうち越後長尾氏は、府中や古志郡（いずれも新潟県上越市）、上田荘（同南魚沼市）など、国内各地に一族がひろがり、統治を進めていきました。しかし、正守護上杉氏はこのことを危険視するようになり、景虎の父為景の時、ついに両者は戦うこととなります。永正四年（一五〇七）、為景は府中で主君上杉房能を討ち、以後越後は内乱状態となりました。国内の反対勢力を抑えるためにも、為景は房能と同じ上杉一族の

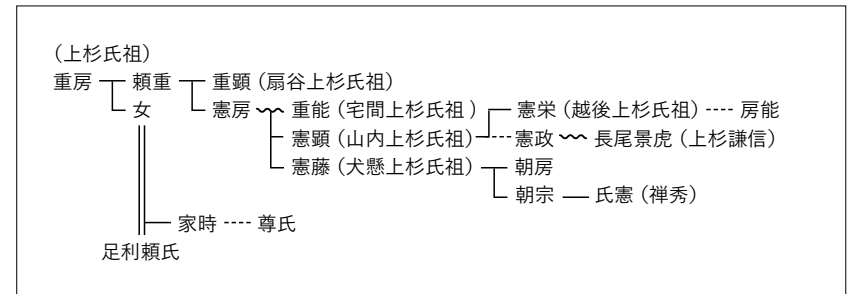


図21 上杉氏略系図

（注）〰は養子関係を示す